

ご講演をお聞きしての感想

1.AIにおける公平性：上田修功先生

○AIが機械学習をする際に、その基となる学習データ作成などにおいて人間が介入することによって明示的・暗示的に差別が埋め込まれてしまう

・AIの導き出す情報がニュートラルあるいは正しいといった漠然とした認識が広がっているため、AIには人間のバイアスが反映されていること、したがって差別を生み出しうることを周知し、使い手がその危険性を理解することが重要

・社会に現にある差別や偏見が、AIによる差別を生み出しているため、その解消のために根本的に重要なのは、社会における人種差別や女性差別などを解消すること

・過去データを学習した結果、AIが差別を生み出したことから、そのデータおよびデータ収集の仕方にどういった差別が存在しているのかを浮き彫りにするという側面もあり、単にそうした結果を出したAIの使用を取りやめるだけではなく、差別そのものの解消に取り組む必要がある

○疑問点

・データバイアス解消のために用いられていた「S：モデル中のセンシティブ特徴」における、センシティブな特徴に何を含むかの選択はどのようにおこなわれているのか

2.AI時代の自律と依存：伊藤亜沙先生

○AIは「制御の対象という点において道具であり、かつ制御を超えている点において人間的（他者的）」であるという伝統的な道具／人間の分類には当てはまらない存在である

○またAIは人工物でありながら人間の手を離れて活動を可能にする「自律性」をもっていると捉えることができる

・家畜・栽培植物とのアナロジーから、人間によって手が加えられるが、完全に思い通りに操作できる対象ではないというAIに対する理解が印象的

・AIが人間の求めるものに合わせて作成され、発展させられていくだけでなく、その発展したAIが人間の生活を変化させていくという相互依存関係（飼う／飼われる）に着目する視点が興味深かった

・AIが自律性をもち、AIと人間が相互依存関係にある場合、AIを一方的に制御するというやり方で、不正や問題が生じたAIをコントロールすることはできないと言えるため、AIの使用およびその結果に対する対応について、さらなる検討が必要になる

○疑問点

・AIが人間のもつバイアスを反映させ差別を生み出す例があるなかで、AIの自律性を認め「他者」のような存在として利用していくことは可能なのか

・LOVOTの例において、LOVOTが仲裁に来たのはどういったプログラムによるものなのか

3. AI時代の宗教と宗教学：藤原聖子先生

○AIの技術の多様化や発展を受けて、宗教もまた多様化しており、特に救済観については、技術によって人間を超える存在を目指す「超人化」と、労働をAIに任せることで「人間」であることをやめて、一時的欲求を満たされた状態を保つなどの立場がある

・救済のシナリオのなかで、超人化を目指す考えは、AIの技術にどれほどアクセス可能かという貧富の差や社会的格差の問題に通じるところがあり、AI技術を利用できる人はより豊かに、利用できない人はより貧しくなるといった非対称性が生じると考えた

・労働をAIに任せることで救済を得ようとする考えでは、現代社会において労働と自身の存在意義を結びつけ、やりがい搾取やその結果の過労死といった問題を生んでいることを考えると、仕事と自身の存在意義を切り離すことができるという点では、有効な側面をもっていると言える

4. 人工知能とバーチャルピーニング：佐久間洋司さん

○大規模言語モデルによって、AIと使い手の双方向のコミュニケーションが可能となり、またAIに関する詳細な知識を持たない多くの人々が簡単に使用することが可能になった

○AIをDoing（機能）ではなくBeing（存在）、バーチャルピーニングとして扱うことが可能に

・一般のユーザーがAIを使用しやすくなったことから、AIがどのように利用され、AIを用いたどのようなサービスが生み出されていくのかに多くの人々の参加による影響が見込まれている。この点でAIはこれからさらに、身近なものとなり人々の生活と切り離せない存在になっていく可能性が高い

・AI を用いた動画配信者が、コメントに対する返答などの過去のデータから、自律的に発言しコメントに返答しているといっても、その制作の段階には人間が介入しているため、バイアスが反映されている点には注意が必要

○疑問点

AITuber の発言の一貫性やキャラクター、および作成時の段階のアイデンティティ形成はどのようにしておこなわれるのか。そこにはジェンダーイデオロギーやステレオタイプといった特定の属性と言動や行動を結びつける考えがあるのではないか。